

《2024年7月 公開サロン（通算333回）報告》

次世代支援について語ろう

—未来を創る 25歳の若者たちに必要な成長支援は？—

【日時】2024年7月12日（金） 19:00~21:00 ⇒ ※終了後は近くの居酒屋で懇親会

【会場】筑波大学附属高校での対面およびオンライン（Zoom）

【テーマ】次世代支援について語ろう—未来を創る 25歳の若者たちに必要な成長支援は？

【演者】磯和明（少年サッカー「くにたちJFC」コーチ、IT企業従事）

【参加者（サロンファミリー 8名）】◎はNPO会員、○は会員外のファミリー

<対面（5名）>

- 磯和明（会社員）、○小針昇平（筑波大学附属中学校）、鈴木博貴（筑波大学附属高校）、◎中塚義実（NPOサロン2002理事長、筑波大学附属高校）、○丸山実花（お茶の水女子大学附属高校）

<オンライン（6名）>

- ◎熊谷建志（会社員）、小島寛典、◎茅野英一（元帝京大学）、◎土谷享（サロン2002）、○野村忠明（埼玉ソーシャルフットボール協会運営委員 会社員）、◎柳井隆志（株式会社HAMONZ）

【報告書作成】熊谷建志ほか

【概要（演者より）】

25歳時点で「こうあったらいいね」という姿のゴールから、逆算で考える必要な幼少の頃からの成長に繋がる体験の場づくりについて、様々な方々の想いを以下のような流れで意見交換・共有出来ればと思います。

- (1)現状把握と未来の環境を予想（10年後、30年後）
- (2)25歳の「こうなっていたらいい」姿のゴール設定
- (3)上記(2)で備わっていてほしい資質（人間力等）は？
- (4)上記(3)に繋がる体験の場とは？

【目次】

I. はじめに

II. 次世代支援にあたっての思い（演者より）

III. 意見交換

- 1) 【2】 想定される環境
- 2) 【3】 25歳頃に必要な人間力等
- 3) 【4】 ゴールを目指した、年代別に適した経験・学び

IV. フィードバック、参加者からの感想

【キーワード】

次世代支援、成長支援、未来を創る、25歳、若者、人間力、少年サッカー、児童養護施設、フットサル、総合型地域スポーツクラブ、学校教育、体育、遊び、磯和明

I. はじめに

中塚理事長による挨拶。

サロン 2002 の活動（「NPO サロン 2002 の主たる事業」など）の紹介後、演者紹介。

（※詳細は略）

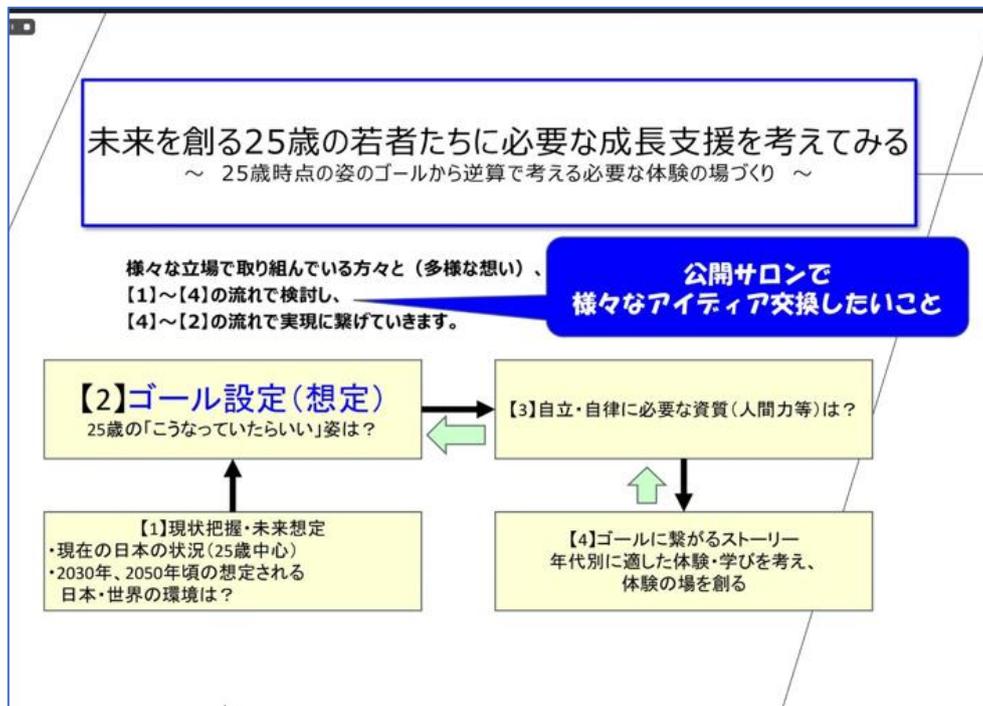
磯：本日はよろしくお願いします。今回は次世代支援というテーマです。

25～6 歳頃の社会で自立できる年代でどのような人になっているといいか（人物像）、そしてそうなるには0 歳児からそれまでにどのような体験の機会があるといいか。これにはいろいろな立場からの意見があるかと考えております。

今回はこのテーマで、参加されるいろいろな方の視点から話をする事で新たな発見や気づきを皆様が得られればと考えています。

II. 次世代支援にあたっての思い（演者より）

磯：今日のアジェンダ、流れについてですが、ここに四角が4つあります。



まず左下「【1】現状把握・未来想定」で、今後世の中どうなっていくか、思いつく範囲でキーワード洗い出していきたいと思います。

次に「【2】ゴール設定」で人物像のイメージを共有した後に、「【3】自立・自律に必要な資質」、よく人間力とかって言われますがこういった資質が備わっているとその姿になれるのだろうかを考えます。

最後に「【4】ゴールにつながるストーリー」で、どういう体験の場があるとそういった資質が身につくか、ゴールから逆算で考えていきたいと思います。

磯：今回の意見交換に際し、なぜ私がこのようなことを思っているのか、まずは自己紹介させていただきます。

私は20代、25歳ぐらいから30歳ぐらいまで、インターネットが普及し始めた頃に色々な異業種交流会に参加していました。そこで50代ぐらいの方が、様々なことを調べて教えて頂いていたので、「いつもありがとうございます。どうしてそんなに調べてまで教えて頂けるんですか?」とお聞きしたところ、「40歳50歳になったら僕らは今までの経験とかを(若い人に)伝えていくのが役割なんだよ」とサラッと答えて頂き(世代ごとの役割をしっかりと考えているところに)、とても感動しました。

その体験から、20代から30代ぐらいまではいろいろと自分で遊び学び、40代以降は同じように次の世代に伝えていきたいな、と当時からずっと考えています。



そういった考えの中で、左上に記載している「児童養護施設の子供たちの支援」のNPOでボランティアは10年ぐらいやっていて、このNPOと連携して自社でCSR活動も行っています。

「少年サッカーコーチ」は21年目になり、ここを卒業した子供たちが集まれる場所として立ち上げた大人のフットサルチームは15年目になり、卒業生も参加しています。

「総合型地域スポーツクラブ」は「ちょっと磯さん手伝ってくれない?」と誘われ、3年目になり、理事をやっています。

最終的なゴールとしては「多くの人が元気になれるという場」にしたいと思い、今日のこの場でいろいろ話を聞きながら、いろんな人が元気になれる方向性みたいなのが見えてきたときに、この総合型地域スポーツクラブの中で実現できたらなと思っています。

磯 : それでは今回のこの「次世代支援」というものについて説明させていただきます。

次世代支援にあたっての思い

■ サッカーコーチを通じて

- 【遊ぶ】環境の減少による課題
外遊びの減少（公園の遊具の減少、ボール遊び禁止、友達の家でゲームで遊ぶ）
→ 走る、転がる、ジグザグに動くなどが出来ない
- 【点】から【線→面】での成長支援の必要性
目の前の、【サッカーの上達と試合の勝利】、に向けたトレーニング
→ スポーツを通じた【将来的な成長】を願い、長期的に【自立】を促すトレーニング
- 多様な子育て
練習準備で子どもの手伝いをする ⇔ 子供に任せる
学校後の大半はクラブや塾通い ⇔ 友達との遊びや家族の時間とバランス

■ 児童養護施設の子ども達の支援を通じて

- 壮絶な虐待
子育ての出来ない人が親になる状態が変わらない

3

まず、同じような経験をされているかもしれませんが、小学校一年生に入ってきた子供が僕らの頃より運動神経が鈍いと感じました。僕は学校でドッチボールや缶蹴りや鬼ごっこ、山登りとかを経験していましたが、今の子供がチームに入団した時にジグザグにも動けないのは「遊ぶ環境の減少による課題」があること感じています。

また指導においては選手が「自分で考える」ことよりも、大人が「試合に勝とう！」という勢いで「勝つためにコーチの指示通りに選手を動かす」となる事があります。チームスポーツとして「チームワーク」や「できないことに対するチャレンジ」、幅広いトレーニングについて、コーチ間で共通認識を持てたらよいと思います。

そして、保護者が自分の時間が欲しいためにほとんど平日はクラブや塾に行かせてるのを見ると「子どもはいつ遊んでるんだよ？」と思い、「多様な子育て」についても考えたいと思います。

また児童養護施設の子供の壮絶な虐待の話を聞くと、25歳頃に向けた若手の成長支援と言ってますが、そもそも「親になる」大人についても皆さんと考えたいなと思っています。

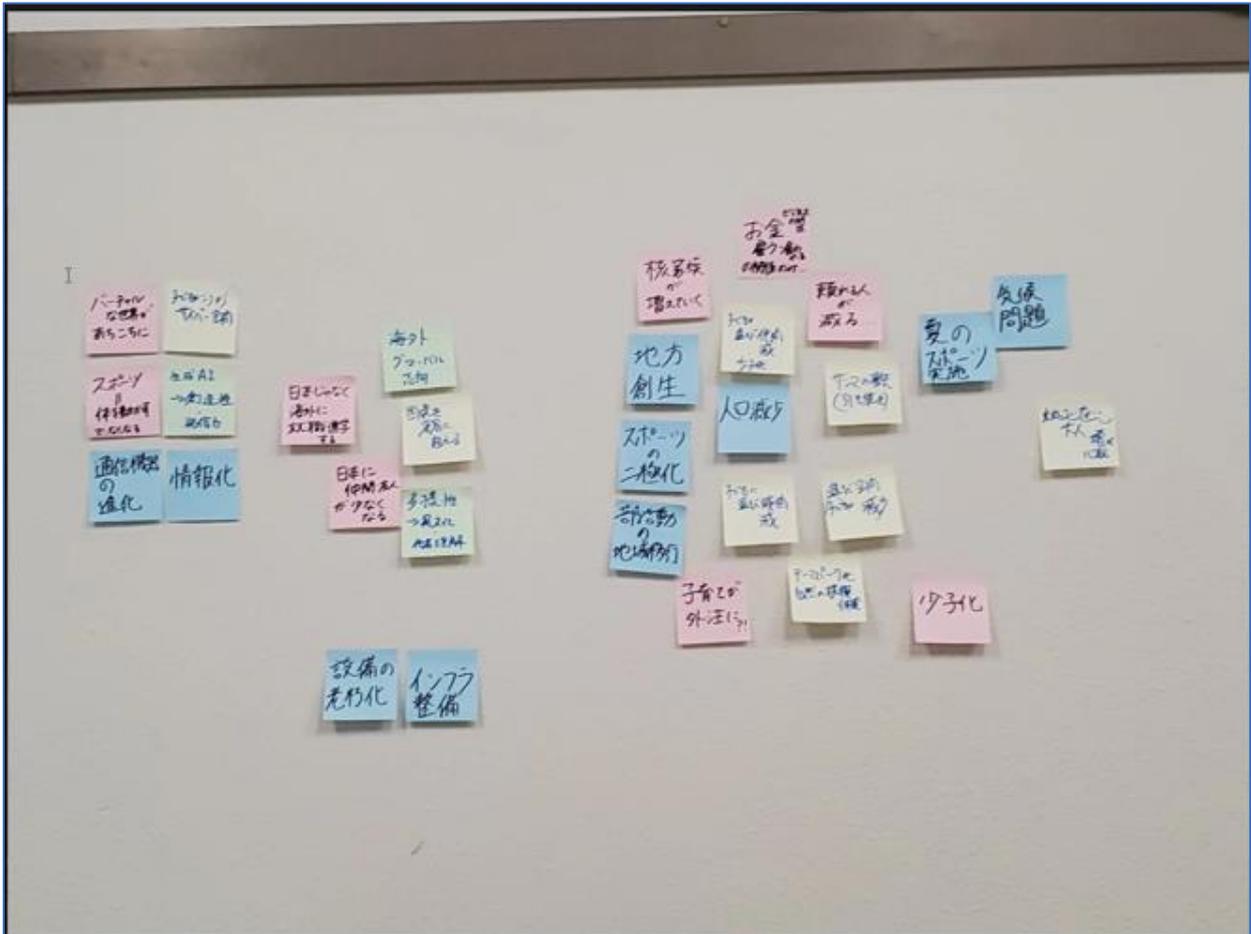
Ⅲ. 意見交換

意見交換は現地メンバー、およびオンサイトメンバーにおいて、自身の考えを記入しながら各自の考えについて書き出し（現地参加者は付箋に記入し、ホワイトボードに貼り出し）、グループ内で共有するワークショップ形式で進行した。

※以下グループ内のディスカッションの詳細は割愛し、貼り出された参加者の意見を記載

1) 【2】 想定される環境

●現地メンバー



●オンラインメンバー

<2030年>

- ・人口減少
- ・温暖化
- ・経済格差の拡大
- ・各種制度の形骸化が著しくなる
- ・教育環境の変化
- ・身体拡張が一般的になってくる
- ・国内の多様な国籍、人種との共存
- ・都市・地方との格差

●オンラインメンバー

<自分らしく楽しく生きる力>

- ・反骨精神の最終章（この後の年齢になるとおちつく）

<人間力>

- ・世の中の仕組みとか渡り方がある程度俯瞰できるようになる
- ・自律（依存せず自分で組み立てできる）

<社会人基礎力>

- ・共感（より多様な人がいる中での立場の理解）

<健康>

- ・生活サイクルが作れる

自分の問題解決能力がある

自分なりに、いろいろチャレンジできること

いろいろなものに好奇心が持てる

本を読んでいる

好きなものがある

やりたいものがある

自分の役割を持っている

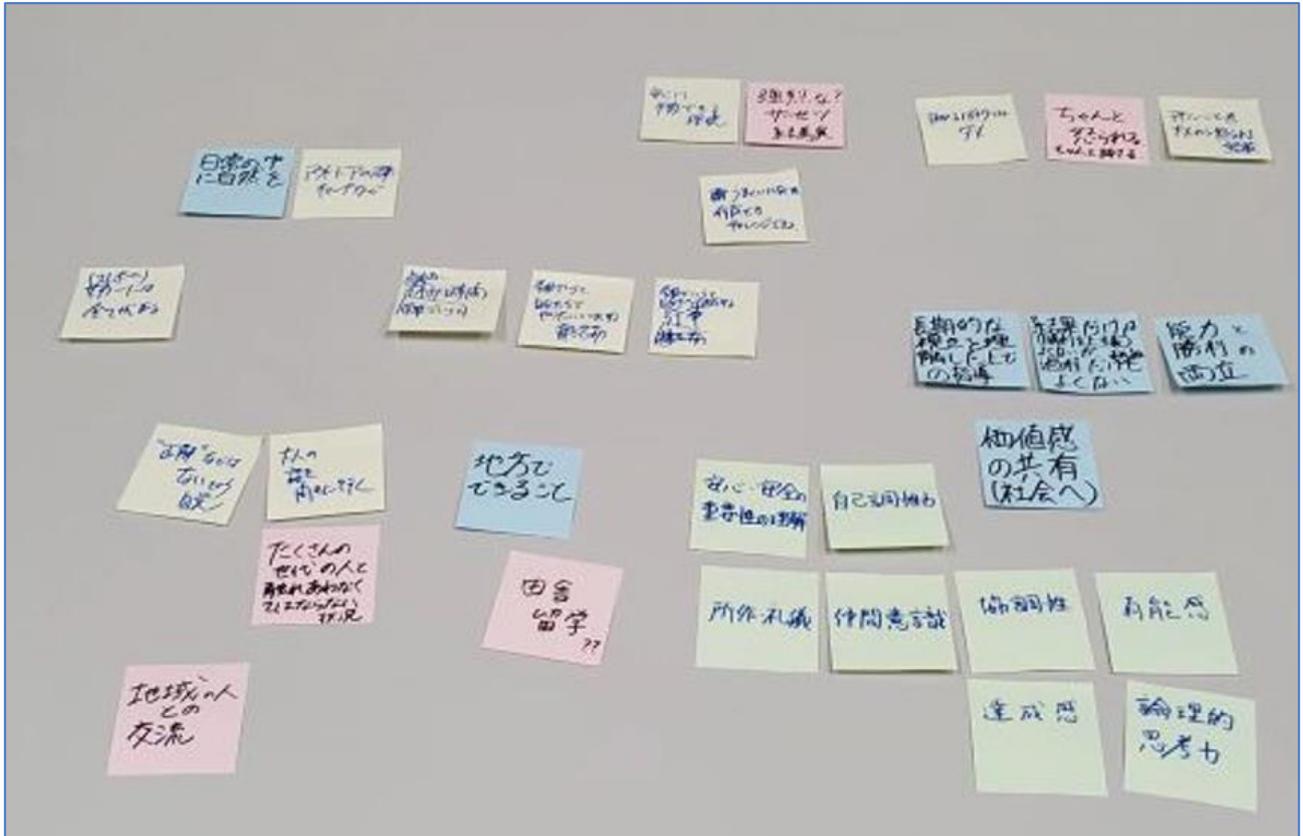
●意見発表・交換

- ・25歳のイメージとして「考える力」「言語化が進む力」はダイバーシティ、AI化の流れに必要なものは？
- ・「共感」より多様な人がいる中での立場の理解、そして他人に影響を受けず自立できる
- ・自分で将来を切り開くために、そのモチベーションをどこで持つかが大事。共感とともに共有することができるのが目指すべき方向か？

3) 【4】ゴールを目指した、年代別に適した経験・学び

※「ゴール」→どのような環境においても、しなやかにクリエイティブに自分らしく好奇心、共感力、共創力で多くの笑顔を

●現地メンバー



●オンラインメンバー

・Aさん

[幼児乳幼児] 地球に生まれ環境を思い切り遊んだり試したり悪戯したりできる環境、それが許される環境

[小学生] ぼーっとする時間が担保される

[中学生] 程よい競走とリスペクト

[高校生] 様々な大人や多様な考えに出会う

[~25歳] 思い切りプレイさせてくれる良き先輩の元にいることができる

・Bさん

サッカーやフットサルで考えました。

パス、ダブルタッチ、シュートが打てる。

僕は、ダブルタッチとシュートが打てないですが、フットサルをプレーしていて、フットサルスクールでは、「パスが回せればフットサルは楽しめる！」とお話いただきましたが、そのようにも思います。

ダブルタッチやシュートが打てるようになると、サッカーやフットサルで遊べるようになるので、楽しさの幅は広がると感じました。

それと、大会の運営にふれる体験をすることも、大切かなと思いました。
自分が楽しんでいる世界の外枠を観ることや、体験することは必要だと思いました。
そのことで、自分の役割ができて、成長できる機会が生まれると思います。

- ・Cさん
経験・体験
- ・マルチスポーツ
(異なるルールを経験、異なる特性の生かし方)
- ・マルチな身体活動と表現
競技化しないスポーツ (ダンス etc)
音楽、絵画、造形 (工作) etc
- ・ (自律のための) 規律
目標設定、ルーチン

●意見発表・交換

- ・規律を持たせる、ルーチンを作り「型」を作ることが自立に必要な面もある、ただ強制する意味での規律を作ることとは異なる。
- ・強豪チームで現役生活を過ごしたが、トップの選手は勝利を目指すとともに自分で考えているところを見てきた。勝利至上主義でもダメだが過程だけ重んじてダメと感じるとともに、目標設定を示せる指導が必要。コーチにもそのようなマインドを共有するべき。
- ・楽しみながらやっている人と本気でやっている人、各々では接し方が変わる、またその両方を選択を示し環境を提供できれば

IV. フィードバック、参加者からの感想

最後に一言ずつ感想、およびやってみたいと思ったことを発表いただく。

中塚：「突破力」は、どこに向かって突破していくか、一所懸命だけどうまくいかないことがある。それでもひたむきに向かう経験を得ることが大事と考えている。

7月7日に筑波大学附属高校蹴球部の保護者会・親子勉強会があり、卒業生2名に話をしてもらう機会があった。いま40歳前後のOBが「クリエイティブのフィールドへ～創造力を仕事にすること」のテーマで話をしてくれた。いまでこそ芸術の分野で賞をとるような成果を上げている者たちだが、高校時代はサッカーばかりやっていた。社会に出るかどうかという時にいろいろ「迷っていた」らしいが、高校時代の顧問(私)に「迷ったらやれ!」と言われたことがずっと頭にあり、挑戦できたという。「すべて高校時代のサッカー部で学んだことだ」と語っていた。壁に当たってもやり切ろうという意欲はどこで培われるのか。しんどいことから逃げようとする、大人もプッシュしない最近の傾向には、こういうことが抜け落ちてしまっている懸念を感じる。

鈴木：社会の環境・構造が変わる(例、人口減少で地方の過疎化が進む、など)ことを考えており、例えば部活動も学校でやってきたことが、どんどん社会に流れていくなどの流れがある。なので教員も教育の専門家として、環境整備に力を入れていく必要があると感じる。今後の環境変化について自分なりにアプローチもできればと思う。

「コミュニティが小さくなる」という点で、経験上、「帰属意識が向上心などモチベーションの原動力になる」と感じていた。グローバルに向かう力が働く今後においては、その中で本当に信頼できる仲間を見つけることが人間力につながる、という話は参考となった。

丸山：発表をとおして「自分の中にまだこんな考えがあるんだな」とちょっと安心する契機となった。今の社会は自分の考えがあっても許さないという感じがあり、頑張りたいと思う 25 歳は頑張れないのでは？と憂うことがある。特に女性は 25 歳の結婚・出産などが重要ということもあったので、女性の方はどのように考えるかはまた変わりそうな気がする。

小針：人によって様々なストーリーがあり、熱中してきたことをもとに経験してきたことがあり、つまるところその人の幸せがある。25 歳の時に幸せになりたいか、人生設計において考えること、目の前のことに全力を尽くすことを 25 歳に向かう今の生徒にもそれを伝えていければなど感じる。

土谷：個人の体験として 25 歳当日を振り返ると、その頃考えていた事は今あまり変わっていない。私の 25 歳頃は、アーティストとしてのキャリアをスタートした時と重なり、アーティストとしての自覚を持って発信しようとしていた。サロン 2002 でも「これからのスポーツ・これからのアート」という視点を発信し、今につながる。今日の話は自分の人生を改めて振り返る機会にできた。

野村：自分が 25 歳の時を踏まえ、今日の話の中で 25 歳の時に「こんな能力が必要だったのだな」と自分に向き合うことができ、参考となった。皆様の意見も大変参考となった。

熊谷：ゴールに示された「しなやかに、クリエイティブに」について、自分が 25 歳の時はそういう方向に行きたかったのかな？と改めて振り返った。自分自身もサッカーの現場で子供たちを見ている点からも、改めて皆様の意見からどのようなことが自分の活動にも期待されているかを考えるきっかけとなった。

磯：ありがとうございました。今回の提示は正解があるものでもないが、私もいろいろな意見から、今後もいろいろな若者と接する中で、今後の自分自身の活動にもこのような体験の場を若者が持ってもらえるようにつなげたいと思います。

中塚：自分を考える、自分の周りを見つめなおす良い機会になったと思います。
(最後に 8 月 1 日の公開シンポジウムの案内、9 月 3 日の公開サロンの案内を行い終了)

以上（続きは茗荷谷駅前の「はなの舞」にて）